

平成 24 年度卒業論文

理想の教師像について - テレビドラマによる考察 -

北海道教育大学旭川校

教員養成課程 社会科教育専攻 社会学ゼミ

学生番号 9321

清水淳巨

目次

はじめに	5
第1章 1960年代～1970年代のテレビドラマ	
1-1 1960年代～1970年代 - 青春ドラマシリーズ	6
1-2 1960年代～1970年のテレビドラマに見る教師像とは	6
1-3 1960年代～1970年代の社会的背景とは	7
1-3-1 テレビの人気ジャンル	7
1-3-2 スポーツと自己実現	8
1-3-3 プロデューサーの思いとは	8
1-3-4 教師の待遇の変化	9
1-3-5 文部科学省の答申との対比	10
1-4 まとめ	10
第2章 1970年代後半～1980年代のテレビドラマ	
2-1 1970年代後半～1980年代 - 金八先生の登場 -	12
2-1-1 『3年B組金八先生』	12
2-1-2 『熱中時代』	12
2-2 1970年代後半～1980年代のテレビドラマに見る教師像とは	13
2-3 1970年代後半～1980年代の社会的背景とは	13
2-3-1 どのようなことが題材とされたのか	14
2-3-2 子どもたちの非行の現状	15
2-3-3 原作者の込めた思い	16
2-3-4 文部科学省答申との対比	16
2-4 まとめ	17
第3章 1990年頃のテレビドラマ	
3-1 1990年頃 - トレンディドラマ・女性教師の登場 -	18
3-1-1 『はいすくーる落書』	18
3-1-2 『うちの子にかぎって』	18
3-2 1990年頃のテレビドラマに見る教師像とは	18
3-3 1990年頃の社会的背景とは	19
3-3-1 臨時教育審議会	20

3-3-2	女性教員数の増加	20
3-3-3	女性教師に対する事件とは	22
3-4	まとめ	22
第4章 1990年代後半～2000年代のテレビドラマ		
4-1	1990年代後半～2000年代 - 規格外の教師・問題教師の登場 -	24
4-1-1	『GTO』	24
4-1-2	『ナオミ』	24
4-1-3	『ごくせん』	24
4-2	1990年代後半～2000年代のテレビドラマに見る教師像とは	25
4-3	1990年代後半～2000年代の社会的背景とは	26
4-3-1	教師の不祥事	26
4-3-2	教師の健康問題	28
4-3-3	教師の立場の変化	28
4-3-4	モンスターペアレントと呼ばれる保護者たち	29
4-3-5	子どもたちの教師に対する気持ちの変化	29
4-3-6	文部科学省答申による比較	31
4-4	まとめ	31
第5章 現代のテレビドラマ		
5-1	現代 - 謎を抱えた教師の登場 -	33
5-1-1	『女王の教室』	33
5-1-2	『ドラゴン桜』	33
5-2	現代の社会的背景とは	34
5-2-1	教師の抱える問題	34
5-2-2	文部科学省答申による比較	34
5-3	まとめ	35
第6章 総括		
6-1	これまでの教師像を現代にあてはめる	36
6-2	総括	36
おわりに		39
参考文献・参照 HP		40

【付属資料】

教師ドラマ年表①(1965年～1999年)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
教師ドラマ年表②(2000年～2012年)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

はじめに

私は将来、教師になりたいと考えている。教師を目指すきっかけになったのは私自身が子どもの成長に寄り添い、その成長の場面に役立ちたいと考えたからである。その中で、子どもたちや保護者が教師と出会う場面というのは学校であり、多くは自分の担任の教師だけである。多くの人考える教師に対する像はニュースで報道される、あまり明るくはないもの、それから漫画やドラマで描かれる教師というものであると考えられる。私自身、幼いころからテレビで教師を主人公にしたドラマを見てきたこともあり、そこから自身が目指す教師というものを考え、将来自分がなる教師の姿についての手がかりを探していくということを本論文では目指していく。

年代ごとにテレビドラマで描かれる教師の姿を見ていき、各年代で求められている教師というもののはどのようなものであったのか考えていく。更に、テレビドラマでそのような教師を描きだすことになった社会的な背景についても考察していく。そこから、各年代の理想の教師像について自分の考えを述べていく。

第1章では1960年代後半～1970年代前半の青春シリーズと言われるテレビドラマから求められている教師について考察し、その当時の社会的な背景について考えていく。

第2章では1970年後半～1980年代に登場する金八先生のような人間味あふれる教師から求められている教師について考察し、その当時の社会的な背景について考えていく。

第3章では1990年代前半の女性教師を主人公としたテレビドラマから、女性教師に求められている教師像について考察し、その当時の社会的な背景について考えていく。

第4章では1990年代後半～2000年代に登場する規格外の教師や問題教師から求められている教師について考察し、その当時の社会的背景について考えていく。

第5章では現在求められている教師像について考察し、現在の社会的な背景から求められている教師について考えていく。これまでの時代に求められていた教師から現代にあてはめて更に考えを深めていく。

なお、ここで扱うテレビドラマはいわゆる学園もののような生徒たちが主役の物語ではなく、教師が主人公となっているものを取り上げ考察していく。

第1章 1960年代～1970年代のテレビドラマ

教師を主人公としたテレビドラマは1965年の『青春とはなんだ』から始まり、現在2012年に至るまでドラマのジャンルの一つとして多く作品になっている。ここではいわゆる学園モノといわれる学校の生徒や学級を主人公にしたものではなく、教師が主人公として取り上げられたテレビドラマについて見ていき、そこからどのような教師として描かれることが多かったのかを考えていく。

教師が主人公のテレビドラマが始まった1965年から、大きく教師像に変化が生じた時代ごとに区切っていきながら考察していく。

1-1 1960年代～1970年代-青春ドラマシリーズ-

教師が主人公のテレビドラマは1965年の『青春とはなんだ』に始まるタイトルに青春のつくものが以後、『これが青春だ』、『進め！青春』、『炎の青春』、『飛び出せ！青春』、『われら青春！』、そして1978年の『青春ド真ん中』まで日本テレビで放送されていく。この頃の教師のドラマの設定は高校に新しくやってくる教師が部活動でスポーツを通して生徒たちと心を通わせていくスタイルである。ここで描かれている教師像というのは、若いスポーツマンタイプでスポーツを通して生徒たちの人格を形成しようという熱血教師である。

しかし、この青春ドラマシリーズも細かく見ていくと、少しずつ時代ごとに描かれていく教師が変化していく。1960年代の教師は自分に強い自信を持っており、子どもたちを引っ張っていく姿勢を貫いていたが、1970年代に入り、『飛び出せ！青春』以降はこれまでの強い教師ではなく、子どもたちと触れ合う中で教師自身が成長していく様子も描かれているのである。

図 1-1 青春ド真ん中



出典：Amazon.jp

1-2 1960年代～1970年代のテレビドラマに見る教師像とは

この章で述べてきた、1960年代～1970年代に放送された教師を主人公としたテレビドラマは主に日本テレビにおいて放送された青春シリーズに代表される。テレビはもちろん視聴者のためにつくられるので、視聴者のニーズに合わせてその内容が変わっていくと考えられる。その点で、これら青春シリーズは1970年代前半までに放送された作品の主人公の教師は、強く、自分に自信を持っており、子どもたちを引っ張っていくそんな姿を描いている。また教師はスポーツの能力にも長けており、その得意なスポーツを通して、生徒たちの人格形成や豊かな心といった部分を教育していく。それを見る視聴者側もそのような教師に共感し、ある意味では教師という像に強さや完璧さ、そして人間として立派である

といった理想を求めていたと考えられる。

しかしながら、1960年代後半になると、実際の世界の教師という職業に今までのような完璧さといった部分はないという認識が人々の間で強まっていく。教師は就く職業としてそれほど高い地位ではなくなってきたのである。テレビドラマはフィクションの世界ではあるが、描かれる教師像はより実際の世界に近いようになり始める。その中でテレビドラマの教師はなんでも完璧にこなせるスーパー教師といったものから、一般的に学校にいるとされる教師をテレビドラマの中で登場させたのである。一見すると何も面白みのない内容のようだが、この頃つくりだされたテレビドラマの主人公教師の「ステレオタイプ」は、この先のテレビドラマでも描かれることが多くなる。夕陽に向かって走り出すという青春ドラマの定番のような描写もこの頃の作品のものである。階段を一段階降りてもらって、「生徒と同じレベルの先生」になって(岡田,2003:98)生徒と一緒に悩んだりする教師を主人公とする一つの形をつくりあげたのがこの時代の作品である。

私を含めて教師を目指すものの中には、教師の資質として必要なものの中に子どもたちの気持ちになって関わりをもつということあげることも少なくない。そのような教師に対する理想像を作り上げたのが、この時代のテレビドラマの作品であると言える。

1-3 1960年代～1970年代の社会的背景とは

この時代のテレビドラマは、高校教師がスポーツを通して子どもたちの人格を形成していくといった内容のものであった。部活動を通しての教師の様子をテレビドラマにした背景には東京オリンピックが行われたためであると考えられる。多くの日本人が身近にスポーツというものを感じ、興味を持ったはずである。

1-3-1 テレビの人気ジャンル

国民の中にテレビが多く普及してきた後、テレビではプロレスやプロ野球などが大衆娯楽として人気となり、それらスポーツは日本が戦後から立ち上がる様子と重ね合わせられた。同時に漫画・アニメの分野でも人気なものは『巨人の星』や『あしたのジョー』などスポーツを題材にしたもので、中でも勝利に向かって根性や努力をもとに練習に明け暮れるという作品が人気があったようである。これはこの時代に開催された東京オリンピックの影響もあるが、テレビドラマにおいても、いわゆるスポ根ものは人気があり、学校を舞台にしたテレビドラマにおいてもスポーツと教育といったかたちで放送されていた。その影響で青春シリーズで扱われたスポーツは主にラグビーとサッカーであった。

その中でこの青春シリーズの舞台は高校であるが、その理由としてはこの頃の学生運動の様子が影響していると考えられる。当時は学生運動が盛んであったため、人々の関心もそこに向いており、学校(大人)対高校生(若者)という対立が同じように関心を集めたのである。学生運動の中心は大学生であったが、戦後間もない頃のものとは違い、1960年代～70年代の学生運動には高校生も多く参加していた。当時の高校生もエネルギーをもっており、

熱血的な教師との対立をさせる上でも非常に良い年代であったのである。そのため小中学校には社会を動かす力を描きにくかった。学園ドラマの舞台が小中学校に移るにはまだ少し時間がかかっていたのである。

1-3-2 スポーツと自己実現

テレビドラマにおいては、部活動の中で生徒たちを教育していく教師の姿が主流となっていた。何も目標もない不良少年であった生徒たちにスポーツという目標を与え、自己実現に向かって進んでいく様子が見られる。これは、スポ根漫画として取り上げた『あしたのジョー』にも同じことが言える。不良少年であった矢吹丈はボクシングに打ち込むようになってから自己実現を目指して戦うようになるのである。そこに読者が共感し人気が出たと考えられる。確かに部活動を通じて生徒たちに良い成長を促すことが期待できるのである。2010年4月に、文部科学省より生徒指導提要在が発表され、その中には子どもたちの生徒指導の理論や考え方、実際の指導についてがまとめられている。通常の授業の中や日常生活、更には特別活動での部活動内での生徒指導についても述べられている。自己実現の基礎にあるのは、様々な自己選択や自己決定である。その過程において、教職員が適切に指導や援助を行うことによって、児童生徒を育てていくことにつながると考えられるため、子どもたち一人一人の個性に合った指導や援助等をしていくことが必要なのである。部活動は、勝つことや試合に出場することなどを目標に行うことが多いが、その結果が不本意なものになっても真摯に受け止めること、目標に向かって努力することなどを通して、将来における自己実現を可能にする力が育まれていくのである。また、そうした選択や決定の結果が周りの人や物に及ぼす影響や、反応などを考慮しようとする姿勢も大切である。なぜならば、自己実現とは、自分自身の欲求や要求を実現するだけにとどまらず、集団や社会の一員として認められることが前提としてあるからである。

テレビドラマの中では、教師の働きかけから、落ちこぼれの生活をしてきた生徒がスポーツによって人格形成がなされ、集団への帰属意識、他者に認められたいという欲求へとつながっていく。今でこそ、このように文部科学省によって部活動による生徒指導が自己実現への一つの役割として求められているが、その様子はこの時代のテレビドラマの中で見るのできるのである。

1-3-3 プロデューサーの思いとは

日本テレビのプロデューサーであり、この青春ドラマシリーズのプロデュースも行った岡田晋吉はこの時代の作品について

昭和40年代の初めの頃は、東京オリンピックを中心に、日本の景気が限界知らずで、どんどんと伸びていた。そんな時代だから、人々は「強い者」にあこがれていた。(中略)ぐんぐんと生徒たちを引っ張っていくから受けたのだと思う(岡田,2003:72)。

こう述べているように、この時代から始まった教師のテレビドラマである『青春とはなんだ』の野々村健介や、『これが青春だ』の大岩雷太、『でっかい青春』の巖雷太は生徒たちには負けない強い圧倒的な力をもとに、子どもたちをスポーツを通して引っ張っていったのである。当時の理想として、教師は完璧であり英雄かのように描かれていたのだと考えられる。

しかしながら、青春シリーズの中でも70年代前半に描かれた教師というのは部活動を中心にした熱血教師を主人公としているものの、これまでのような明らかなリーダーシップというものは感じ取れない。新任教師を主人公にしており、子どもたちとともに問題を解決していく中で教師自身が成長していくという様子を描いている。ここには、大きな社会の変化というものが見て取れる。それは、初めから英雄ではなく、普通の人間が努力して英雄になることの方がリアリティがあり、望まれる時代になってきた(岡田,2003:72)からである。教師という職業も以前ほどの地位の高さではなくなり、教師不足から教師の志願者のほとんどが採用されるといった時代であり、「教師にでもなるか」といった消極的な動機から教師を目指す者も少なくなかったのである。そのため、60年代後半で描きだしたような、現実的にそんな「先生」は存在せず、絵空事にしか見えなくなってしまった(岡田,2003:98)ため、ドラマ内で描きだす教師にも変化が生じ始めたのである。教師が初めのうちは失敗を続けるが生徒たちと触れ合っていく中で努力し、生徒の立場に寄り添うことで生徒のことを理解していくことができるのである。そうして教師自身が成長するという今までは生徒という部分だけにあてられていた成長ということが教師にもあてはめられて描かれ始めた。これは、少しではあるが教師の人間味がテレビドラマの中でも出てきた時代でもあるということが言える。

1-3-4 教師の待遇の変化

この時代は教師の待遇が変わった時代でもあり、より魅力的な職業へと変わっていった時期でもある。1971年には、教職員給与特別措置法が制定され教員に超過勤務手当は支給しないが、超過勤務時間にかかわらず俸給月額の4%を教員調整額として支給するようになった。更に、現在は一般公務員給与も改善されたため相対的な優位は大幅に減少したものの、1974年の人材確保法では学校教育の水準を維持するため他の一般の公務員の給与水準に比較して給与の優遇措置を定めたのである。そのため、行政職よりも給与の面で上回り今まで低収入であった教師という職業に魅力が出るようになり、経済的な待遇が改善され魅力的な職業へと変わっていったのである。このような待遇の変化からも、この時代のテレビドラマで描きだされた教師たちよりも、今後の時代では社会的な教師の立場の変化によって、実際の社会の教師という職業自体のもつ価値観も変わっていき、テレビドラマでも描かれる教師像に変化が出始めたと考えられる。

1-3-5 文部科学省の答申との対比

この頃の文部科学省より出された答申、1971年の「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について(答申)(第22回答申(昭和46年6月11日))」では、教員は専門職であり、他の一般的な職業とは違った面を持つとされている。それは、子どもたちの個性の発達に即する的確な判断にもとづく指導力が要求される仕事であるからである。教師の資質としては高い専門性の向上と指導能力、意欲と使命感を持っていきいきとした活動を展開することであるとしている。

この点については、1960年代からのテレビドラマでは教師の学校での授業の場面などは描かれておらず、専門性や教科の指導能力といった部分は見ることができない。そこが現実の教師と簡単に対比することができない部分なのかもしれない。しかし、生徒たちとスポーツでの関わりの中でそれぞれの個性を把握し指導している様子は見てとれる。このような点から、テレビドラマの中の世界においてもこのように子どもたちとのふれあいがあり、教師自身の得意なことを生かして、子どもたちを正しい道へと導いていこうとする意欲や情熱といったものを感じることができる。教師は自分の得意とする何か(教科そのものやスポーツ、芸術など)を持ち、自分の強みを生かした教育というものが大切になってくるのである。この時代のテレビドラマ内の教師はスポーツによって子どもたちの尊敬を集めていたが、このことは現代においても教師に必要な要素の一つであると考えられる。自分の得意なことを通してよりよい学級経営や子どもたちとの関わりをしていくことが必要となってくるのである。このような教師のやり方が視聴者に受け入れられ、国民の中にも教師は子どもたちのことを良く理解し、情熱的に接していく職業であるという教師像が作り上げられていったと考えられる。

1-4 まとめ

この時代は社会的背景として日本という国の大きな変化の時代であったことがわかる。テレビ自体が普及してきたこともあり、国民の関心の多くはスポーツであったように思う。1960年代後半は東京オリンピックもあり特に国民の中の関心は強くなっていった時期でもあり、その中で弱い者が努力をして強い相手に勝つといった部分が特に好まれた。その戦後日本の復興の様子と重なり多くの共感を得たのがスポ根ものである。教師が主人公のテレビドラマにおいてもその様子が見られ、不良の劣等生たちという弱い者をスポーツを通じて更生させ、試合に勝つために努力をしていくのである。そして、そのスポーツをする中で、不良生徒たちの中に帰属意識や他者に認められたいという欲求を生み出し、自己存在感につなげていたのである。さらに、共感を得るために校長や教頭が悪役として登場している点も、現在まで続く学園ドラマの定番と言える設定であるといえる。

時代としては学生運動もあり、大学生を中心として、高校生も含めた若者が多く社会を変えようと行動していた時代であった。その対象として若者対大人が描きだしやすい高校生が学園ドラマの生徒として選ばれていたのだろうと思う。教師像としてはスポーツマン

で爽やかな男性教師が描かれており、そのスポーツで子どもたちと接し、子どもたちの心を変えていこうとしている。教師は何か自分の長所を持って子どもたちと接することで教師自身の強みを持って指導できると考えられるので、ここから現在の教師にあてはめて考えることもできる。

当初、この時代では教師は完璧でリーダーシップがあることが求められていた。しかし、時代の変化により、より現実的な教師が人々の中に求められ始めていったのである。テレビドラマ内においてもより現実世界に近い教師像で主人公の教師が描かれ始め、フィクションではあるものの人間らしい教師で子どもたちのことを一番に考える教師が求められ始めたのである。

また、汗と涙のスポ根学園ドラマの定番と呼べる、夕陽に向かって走り出す様子や海岸線をラグビーボールをパスしながら走る様子などの描写がいくつかあり、今後の青春学園モノのテレビドラマの基礎がつくられた時代であるといえよう。

第2章 1970年代後半～1980年代のテレビドラマ

2-1 1970年代後半～1980年代 - 金八先生の登場 -

以前までの教師を主人公としたテレビドラマは、部活動を中心に描かれていたが、学校内の授業の様子などはあまり描かれずあくまでも教師と子どもたちのスポーツを通しての教育の様子にとどまっていた。しかし、この時代からは中学校や小学校を舞台としてスポ根モノからよりリアルな教師の日常や子どもたちに起こる問題の解決の様子が描かれ始める。その中でも代表的な作品として、『3年B組金八先生』と『熱中時代』がある。ここではその代表的な2作品から教師像を考えていく。

図2-1 3年B組金八先生

2-1-1 『3年B組金八先生』

この頃から主人公である教師は、中学校の教師として描かれ始める。その代表的な作品が長年にわたって放送され、多くの人に愛されてきた『3年B組金八先生』である。この作品は今までテレビドラマではあまり触れられなかった学校現場の実情をよりリアルに社会問題と照らし合わせていたことから多くの関心を集めることになる。1979年に第1作目を放送し、その一年後にはすぐ第2シリーズが放送された。各シリーズごとに社会問題になる事柄を取り上げ、それを今までのようなスポーツによる理解だけではなく、学級内や日常生活の中において心と心で熱く接することで生徒たちを理解していく様子が描かれている。



出典：Amazon.co.jp

原作者の小山内美江子は『25年目の卒業 さようなら私の金八先生』の中で、今度のドラマに二枚目はいらぬ。生徒のためにはなりふり構わずぶつかっていく青年教師が欲しかったのだ(小山内,2005:31)と述べている。青春シリーズで描かれていたドラマの中の教師は、運動神経が抜群のスポーツマンタイプであったが、小山内がつくりだした坂本金八は熱血さと、より人間らしさのある実生活にリアルな教師であり、その中からどこまでもとことん子どもたちのために突き進む教師というのが誕生したのである。

2-1-2 『熱中時代』

このドラマの舞台が今までの主流であった高校から小学校になった初めの作品である。この作品は、小学校の新任教師が体当たりに情熱をもって子どもたちに接し、この時代増えてきた教育問題を解決する様子を描いている。子どもたちと向き合うことから逃げることや、教師という立場で教室を支配することなく、新任教師が子どもたちとともに成長していく様子が教師に対する共感や憧れを生み出した。近年の作品と違うところは管理職である校長先生が非常に教師に対して協力的であるということである。校長先生の家に居

候しているということ自体も近年では珍しいことではあるが、新任である水谷豊演じる北野広大に対して立場上突き放すのではなく、優しく接している場面も見られる。

2-2 1970年代後半～1980年代のテレビドラマに見る教師像とは

この年代は教育問題が社会の間に多く表出してきた時代でもある。その中でメディアで報じられることも多かったが、中高生の教育意識の高まりによる受験戦争やいじめなどの学校現場で起こる様々な事件や、それに伴う若年層の自殺ということが大きな社会問題になってきていた。学校における少年非行は年々増加してきている時期でもあり、生徒同士のけんかや更には教師への暴力といった校内暴力もしばしば起きていたようである。その中で、この時代に放送された教師を主人公としたテレビドラマは、少し前の青春シリーズとはまた少し違った視点で物語がつけられている。

今までのテレビドラマでの教師の立場は高校の部活の顧問という立場での生徒とのかかわりについて主に物語がつけられていたが、この頃の作品では教師の職場が小学校や中学校になっており、先に述べたような一般の学級に起こりうるような問題に対して担任の教師が熱血的にその問題解決に奔走する様子が描かれている。これは、視聴者の意識を引き寄せ、ただ単にテレビを見て楽しむという感覚よりも、このテレビ見ることによって何かを考えさせるという意味合いも強かったのかもしれない。

しかしながら、この頃のテレビドラマから見えてくる理想の教師像は、子どもたちのことを親身になって考えてくれる教師であると考えられる。小学校の高学年や中学生、特に中学3年生のこの年代は人生においても非常に大きな地点である。思春期の真っただ中で多くの悩みを抱える時期でもあるし、この時代の子どもたちにとっては親が生きてきた時代とは違い、数多くの教育問題の中で生きていくことはとても難しいことであったと思う。その中で、教師という子どもたちにとって親の次に自分たちにとって身近な存在はとても頼りになるべき人でなくてはならない。この時代のテレビドラマで主人公として子どもたちが求めているであろう教師を描きだし、その解決をしていく姿は当時の子どもたちにとって心強かったにちがいない。

この時代に確立された、学級内での問題に対する熱血的な解決というものはいつの時代も教師の側も目指しているし、子どもたちの側、それから保護者にしても期待している部分が多いように思う。そしていつの時代もここで描きだされた教師というものが人々の根底にあり、熱血で子どもたちのために、という教師が求められているのである。

2-3 1970年代後半～1980年代の社会的背景とは

1970年代後半～80年代で描かれている教師像というのは、子どもたちと教師という職業上の距離感はあるものの、教師側が自ら子どもたちの中へ飛び込んでいき、子ども理解をしようとする様子が見て取れた。社会の変化により、教育界にも受験に関すること、中学生による自殺や非行といったことなど問題が生じてきた時代ではあるが、ドラマの中で教

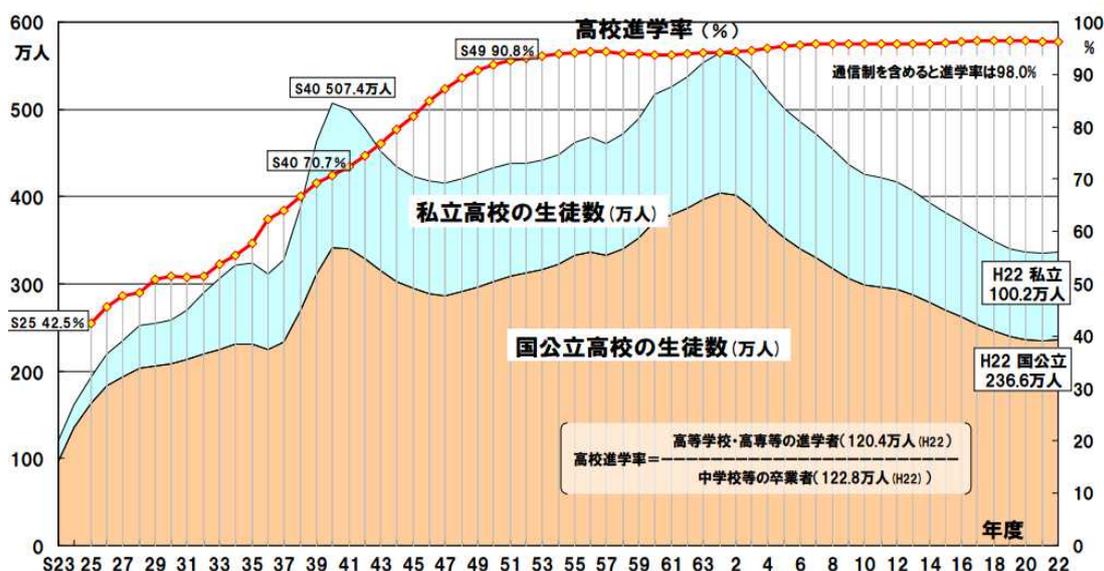
師は子どもたちにとって身近な存在であり、熱意を持って問題解決に向かっているのである。そして、当時それを見ていた同年代の子どもたちはそのような教師に憧れ、理想としていたのである。

2-3-1 どのようなことが題材とされたのか

この時代の教師のテレビドラマの特徴には、学校現場で実際に起きている問題について取り上げていることが挙げられる。1970年代後半には、『3年B組金八先生』や『熱中時代』のような作品が登場し始めた。それらの作品が取り上げているテーマとしては、中学校を舞台にしている『3年B組金八先生』ではこの当時問題となっていた、中学生による受験戦争、自殺、校内暴力、いじめ、万引き等々である。

確かにこの頃の新聞記事や事件を調べてみるとセンセーショナルな内容のものも少なくない。1979年1月14日エリート高校生祖母殺害、2月中三女子が成績表を焼くために学校に放火、その他、高校受験を苦しめた自殺など学校での成績や受験に関連する事件や自殺というものが多く報じられている時代でもある。このような成績や受験というものが子どもたちの中で重要視されていった背景としては、日本の家庭の所得が増えたことが考えられる。日本は高度経済成長という景気の高まりの中所得にも余裕が生まれ、その分を子どもの教育にあてるということが多くなった。そこから子どもを通塾させるなどして、教育という部分で過熱が見られるようになったのである。受験戦争というものは1960年代頃の大学受験の過熱ぶりを指す言葉であった。良いところに就職したかったら良い大学に入るべきだという、根拠はないものの今でも人々の中に残る考え方が生まれてきたのである。

図 2-2 高校進学率の推移



出典：文部科学省高等学校教育の現状

そして、この時代には、良い大学に入るには当然良い高校に入らなければならないという考え方が生まれてきたのである。図 2-2 から高校への進学率もこの頃、9 割を超えていることが分かる。1960 代頃までがピークであった「金の卵」と呼ばれるような中卒の東京に出てくるような若者も減ってきたのである。そのため、中学生の間にも勉強や入試に関することが現実の大きな問題として降りかかってきたのである。

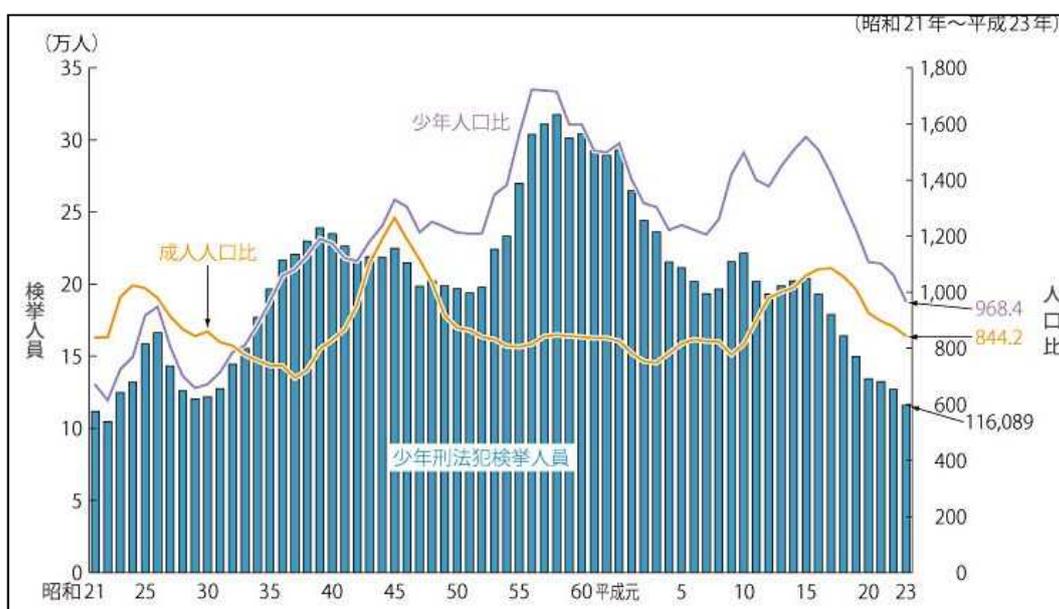
また、それと同時に子どもたちの非行の問題というものもこの時代に増えてきているのである。そのような背景からテレビドラマ内においても、学校や学級内におけるいじめ、さらには教師に対する暴力行為や学校の備品の破損などより世間に近い様子が描かれた。

2-3-2 子どもたちの非行の現状

図 2-3 からわかるように、日本における少年非行には大きく 3 つの波があると考えられる。一つ目は、1951(昭和 26)年の 16 万 6433 人をピークとする波、二つ目は 1964(昭和 39)年の 23 万 8830 人をピークとする波、三つ目は 1983(昭和 58)年の 31 万 7438 人をピークとする波である。これらの時期に起こった背景としては、第一の波は戦後直後ということもあり、社会的混乱と経済的困窮により少年非行が増加したと考えられる。第二の波は、急速に進んだ経済成長の中で、都市への人口の集中や享乐的風潮の強まりによって青少年を非行へと誘発しやすい社会構造が背景にあったと考えられる。その中で 3 年 B 組金八先生第 1・2 シリーズや熱中時代が放送された 1979 年頃は、日本が高度経済成長によって経済的豊かさが欧米並みとなり、親子の関係の希薄化や核家族化が進んできた。

そうすると、家庭には保護者がいなくなり増加してきた親の共働きなどで子どもたちと

図 2-3 少年非行検挙数・人口比



出典：総務省犯罪白書

触れ合う機会が減ってきてしまう。その結果、家庭での子どもの変化に気付きにくくなり、子どもが非行へと進んでしまうことを防げなくなってしまうのである。同時に、地域社会での無関心というものも要因の一つとして考えられる。以前のような密な地域社会ではなくなってしまう、子どもたちを地域で育て上げられなくなったことにより、子どもたちを非行へと進めてしまったということも考えられる。

また価値観の多様化が進み、海外などの影響も多く受けている時代でもある。その中で当時の流行というものを見ていくと、外国の文化も多く流入してきており黒人のソウルミュージックというものから当時の子どもたちもパンチパーマなど髪型の面で影響を受けた。更に、日本ではヤンキーたちのカリスマ的存在であった矢沢永吉も当時の不良中学生に影響を与えていたと考えられる。そこから髪型もヤンキーの代名詞ともいえるリーゼントが流行したのである。青少年を取り巻く今までとは違った様々な要因によって、少年非行は第三の波のピークを迎え始めた。このような背景のもと特に中学校は荒れているところも少なくなかったのである。

2-3-3 原作者の込めた思い

子どもたちの受験という問題や、少年非行の多さという現状を知った3年B組金八先生の原作者である小山内は、自身の息子が当時高校1年生であったことから、息子とその友人に中学校時代学校の様子や教師の様子などを愚痴を聞くかのようにして当時の中学校の様子をつかみ考えを固めていった。小山内は舞台を中学校3年生にしたことについて

中学校3年生は、高校受験という、人生で初めて選別を受ける年代です。私は、この3年生たちに、選ばれるな、自分の人生だから選んでいけ。そう訴えたいの。応援歌です(小山内,2005:28)。

と述べている。テレビドラマをつくる際の対象は大人ということを考えがちだが、実はこの作品は同年代を生きる子どもたちへ向けた作品だったのである。同時期には中学生日記というNHKで放送していた中学生にスポットをあてた作品もあったが、中学生へ向けた番組はこれしかなかったため、挑戦しがいがあった(小山内,2005:62)とも語っている。自分と同じような悩みを抱えているような生徒役と金八先生の対話やかかわりを通して、視聴者である子どもたちへの悩みの解決の道を示していた。

金八先生はこの時代問題となっていた受験戦争や少年非行など、多くの生徒たちを取り巻く問題について手助けしてくれる親身な教師を描いた作品なのである。

2-3-4 文部科学省答申による比較

1978年の「教員の資質向上について(答申)(第24回答申(昭和53年6月16日))」では、教員の資質向上についての発表がなされた。その中で、学校教育の成果はこれを担当する

教員に負うところがきわめて大きく、そこで、教員の資質能力を向上させることは教育の発展のための基本的な課題であるとされている。

そうした中、国民の間には、教員に対して広い教養、豊かな人間性、深い教育的愛情、教育者としての使命感、充実した指導力、児童・生徒との心の触れ合いなどをいっそう求める声が強くなっていった。学校教育の成果を高めるためには学校における教育指導ばかりでなく、家庭や社会における教育的配慮と学校に対する積極的な理解と協力が必要となってきたのである。ひとりひとりの子どもの健やかな成長に対する父母の強い願いを、教員自らが更にその重責を深く自覚して、不断の教育実践と自己啓発に努め、学校教育に対する国民の信頼に応えることが期待されている。

このように文部科学省の答申の中では言われているが、1970年代後半のテレビドラマでの教師は、教師の人間性にスポットをあてた作品が登場し、自分の熱い気持ちを貫き、子どもたちのために深い愛情をもって接している様子を見ることができると言われている。また、家庭や地域と学校との関係性も見られ、これらの点が文部科学省が報告している国民の求める声と一致したのではないかと考えられる。

2-4 まとめ

この当時の社会的背景として、教育的な変化として受験戦争と呼ばれる勉強に対して大変な時代であったこと、生活面の変化では社会的に少年非行が多くなってきた時代であったことが挙げられる。受験戦争においては、より高い収入を得るため、さらにはよい職業に就くためによい大学に入学することが求められた。それが受験戦争である。そこから、よい大学に入るためにはよい高校に入学しなくては、という風潮になったと考えられる。それがこの頃中学生の間にも広がってきたのである。文部科学省の発表にもあったが、教師の力量が学校教育を左右するとも言えるので、教師の資質の向上が求められ始めた時代でもある。少年非行においては、子どもたち自身だけの問題ではなく、様々な要因によって非行へと進んでいったことが考えられる。そこには、学校そのものや教師の問題、親子の関係の希薄化による問題、地域の無関心さによる問題等が考えられる。実際の教師たちの中には子どもたちの一面だけを見てこの生徒は駄目だと決めつける場合もあったのかもしれない。しかし、テレビドラマ内の教師たちは、自分の生活をなげうってでも子どもたちのために行動し、そして子どもたちの問題を解決しようと奮闘している。子どもたちとのふれあいはもちろんのこと、表面的に見える子どもたちの行動だけでなく、家庭環境の把握や地域との連携、その地域との関係性を大切に、その地域の教育資源の活用をするなどしながら最も良い解決法を模索していくのである。

原作者の思いにもあるように、社会的に大きな変化の中を生きる子どもたちに向けてつくり出された教師は、子どもたちの味方であり、この時代だけでなくどの時代も愛され、長年に渡っていたら良いと思われる教師であった。

第3章 1990年頃のテレビドラマ

3-1 1990年頃 - トレンディドラマ・女性教師の登場 -

この頃のテレビドラマの傾向は、いわゆるトレンディドラマの全盛期であり、男女の恋愛や女性目線での物語が多く登場してきた時代である。その中で今までは主人公に男性教師を陰で支えるようなかたちで描かれることが多く、ほとんど取り上げられることのなかった女性の教師を主人公としたテレビドラマが描かれ、女性の教師に焦点を当てた作品が登場し始める。さらには、この時代までテレビドラマによってつくられてきた熱血教師とは違った視点で描かれた作品も作られ始める。ここでは、女性教師の奮闘ぶりを描いている作品『はいすくーる落書』と今までとは異なった教師像として描かれた作品『うちの子にかぎって』について考えていく。

3-1-1 『はいすくーる落書』

工業高校の男子ばかりの学級に赴任する、どこにでもいる女性が主人公である。教師になる動機もそれほど情熱的なものではなかった。当初は学級の男子生徒にからかわれたり、問題児が多い学級ゆえに問題に直面したりするなどするが、誠実に対応する中で生徒や教師たちから信頼を受けていく。原作者の多賀たかこは、自身の体験をもとに書いている。原作では農業高校での様子を書いているがテレビドラマでは工業高校での様子になっている。原作とは違うものの、女性教師の奮闘ぶりを見ることができるテレビドラマである。

図3-1 はいすくーる落書



出典：Amazon.co.jp

3-1-2 『うちの子にかぎって』

少し前までの定番であった教師が絶対的な力をもって子どもたちや学級をまとめていくというものではなく、頼りない主人公教師が子どもたちに振り回されながら物語が進んでいく。子どもたちの生活が中心であり、あまり主人公教師の出番は多くないが、子どもたちがつまづいたときに子どもたちが自分で考えられるようなヒントを与えているのである。自分の主張を子どもたちにぶつけて引っ張っていくという様子は見られないが温かく成長を見守っているのである。舞台は小学校であるが、小学5年生という大人になりかけている子どもたちの様子を実際の世界と同じように描いている。定番化されつつあった熱血教師と問題児という対立もなく、日常の様子をより現実的に描いているのである。

3-2 1990年頃のテレビドラマに見る教師像とは

この時代のテレビドラマは女性教師を主人公にしたものが描かれ始めている。これは、社会的背景として、女性の社会進出といったものも一つの要因として考えられる。加えて、

当時のテレビ業界の流行もあったと思われる。当時のテレビドラマの多くはトレンドドラマと言われる男女の恋愛模様を描いた作品であり、女性層の視聴者が多かった。そのため、女性へ向けたテレビドラマが多くなっていたのである。教師を主人公にした作品であっても、教師の学校以外プライベートの恋愛の部分を描きだすものや、教師と生徒の恋愛といった部分を中心にした作品まであった。今回ここで取り上げた作品も今までとは違い、女性を主人公としている。そして、その主人公の女性教師たちはどれも他の男性教師に負けないようなほど強い姿で描かれている。舞台は多少なりとも荒れた学校において、かわいらしい女性教師が担任をするという対比のような構造である。一般的に考えられる女性教師のイメージは、男性教師と比べて強くなく、体を張って仕事をするということもあまりないということであると思われる。

しかしながら、ここで登場している教師たちは子どもたちのために一生懸命に問題に向き合い、学級や子どもたちに起こる問題を解決していくのである。その様子を見て、当初は性別やその見た目から大人しくか弱い教師であると考え、からかっている男子生徒たちも主人公の教師の熱心さや自分たちに対する想いに接する中で、次第に心を開き信頼していくのである。女性教師に対する事件も多く発生した時代ではあったが、女性教師の弱いというイメージをテレビドラマによって変え、世間の女性教師に対して応援していたのではないかと感じる。自分の生活というよりも、生徒たちの為に全力を尽くし熱心に取り組むことから、女性教師に対する理想像は男性教師同様に強く、自分たちのことを引っ張って行って欲しいと感じていたものではないのだろうか。

また、それとは対照的にゆるさをもった教師というものも登場した時代でもある。以前のような、熱血教師が子どもたちを自分の信念によって正しい道へと導いていくのではなく、子どもたちに振り回されていく教師なのである。この頃、教育の方向性として子どもたちの自主性を尊重することが求められていた。『うちの子にかぎって』で登場した主人公教師は学級会などの場面において、基本的には子どもたちを信頼し自主性のもと物事を決めさせる。そのことによって問題が生じることもあるのだが、その際も自分の考えを押し付けるのではなく、「良く考えてみる」と言うだけで最終的な結論は本人たちに任せるのである。当然学級の実態に応じて、強く力のある教師が求められる場合もあると考えられるが、このテレビドラマの中では活発な子どもたちが多くもあり子どもたち主体の学級経営ができていたのである。このようなことから、この時代の女性教師に代表されるように強く引っ張っていく教師とともに、温かく見守りながらも子どもたちに自分で考えさせ、自分で解決させようとする教師も求められていたのだと考えられる。

3-3 1990年頃の社会的背景とは

この頃は昭和末から平成という時代である。社会全体はもちろんテレビの世界でも女性の活躍が目立ってきていた。また教育界では、新しい方向へ進み始めた時代である。臨時教育審議会が発足し、その中で教育の自由化や個性の重視、生涯学習の推進など、この後

の教育界へ影響を与える提言がなされていたのである。

3-3-1 臨時教育審議会

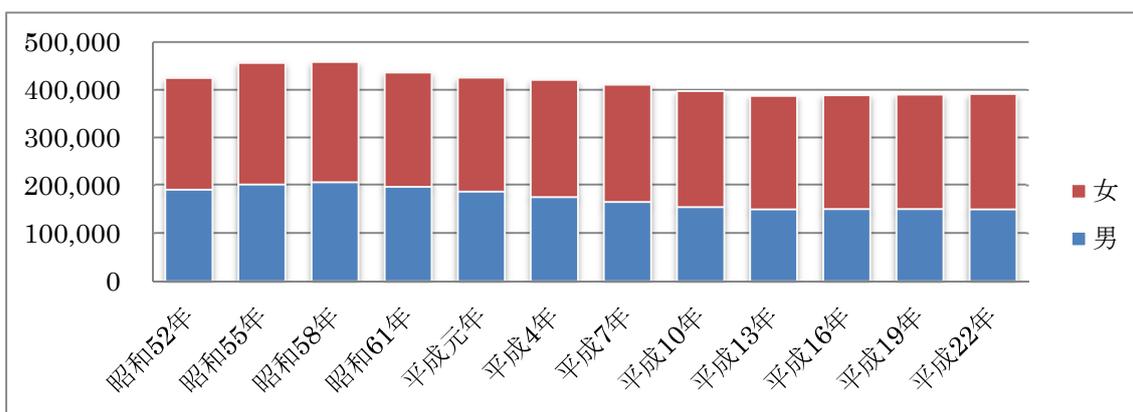
教育界では、第2章で述べたような少年非行による問題や受験競争の過熱、いじめ、不登校など学校での多くの問題が起こっていた。そこで政府全体として教育改革に取り組むために、1984年に中曽根内閣のもと発足した行政機関が臨時教育審議会であり、1987年の第四次答申までに3年間で4つの答申をまとめた。基本的な教育改革の考え方は個性重視の原則・生涯学習体系への移行・国際化情報化等への変化への対応の3つに集約された。

個性重視の面では、子ども一人ひとりの個性を生かし主体的な学習活動を伸ばしていく教育実践が求められるようになった。新しい学力観として従来は知識・技能・理解が学力の中心と考えられてきたが、関心・意欲・態度も学力の中核を担うものであると位置づけた。国際化情報化等への変化への対応についても、留学生の受け入れや学校におけるコンピュータやソフトウェアの整備を提言し、これらの考え方が平成元年改訂の学習指導要領に影響を与えたと考えられる。

3-3-2 女性教員数の増加

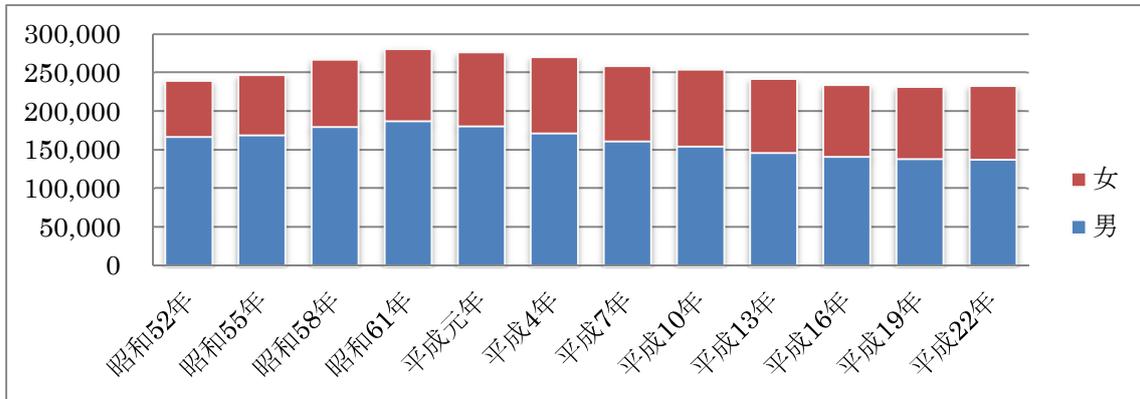
グラフ3-1~4では学校種ごとの男女の教員数について示しているが、中学校や高等学校では女性教員の絶対数こそ少ないものの、全体として女性教員数は増加していることがわかる。幼稚園教諭に関しては現在自分が感じている感覚の通り、以前と変わらず女性が多くなっている。

グラフ 3-1 小学校教員数



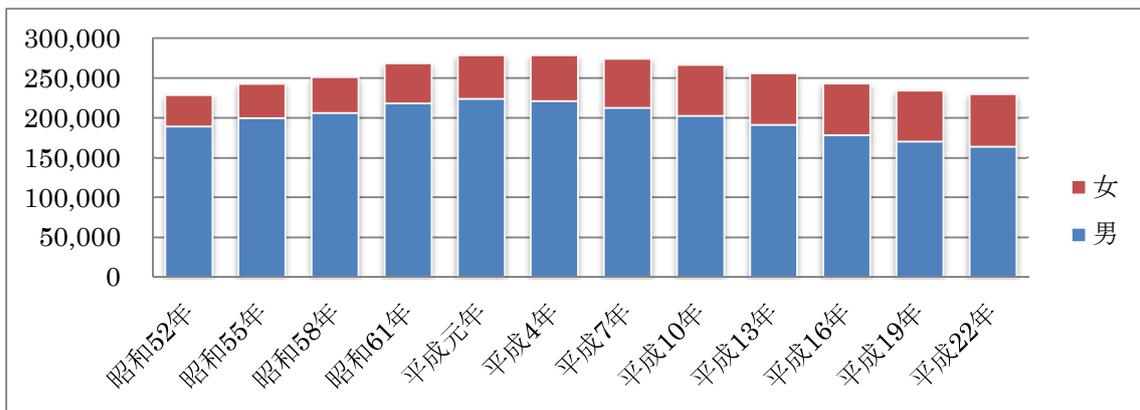
出典：文部科学省学校教員統計調査より筆者作成

グラフ 3-2 中学校教員数



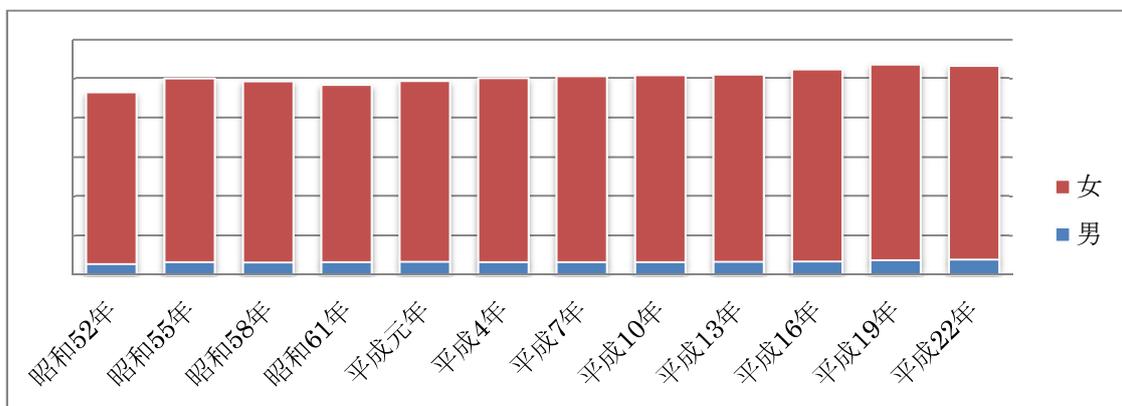
出典：文部科学省学校教員統計調査より筆者作成

グラフ 3-3 高等学校教員数



出典：文部科学省学校教員統計調査より筆者作成

グラフ 3-4 幼稚園教員数



出典：文部科学省学校教員統計調査より筆者作成

教師に限らず、1990年代ごろからは世間においても女性の社会進出が目立ってきている。これは、1985年に制定された男女雇用機会均等法により、女性の社会進出が進んだことが大きな要因であると考えられる。そこから、テレビドラマでは女性教師を主人公にした作品も登場し始めたのである。はいすくーる落書の原作者である多賀たかこ自身も教員であるが、最初のころは、この「女だから…」が耳について非常に困った(多賀,1988:61)と自身でも言っているように学校で他の教師と話をする際には、他の男性教師から女性教師であるために下に見られるようなこともあったようである。多賀自身の農業高校での教師時代の話であるので、グラフからもわかる通り高校での女性教師というのが珍しかったため女だからと言われることがあったのかもしれない。更に付け加えるなら、普通科ではなく農業高校と言うところにもその珍しさがあったのかもしれない。しかしながら、学校種を問わず当時の新聞記事ではやはり女性教師ということていくつか事件が起こっているのである。

3-3-3 女性教師に対する事件とは

第2章で示した少年非行の図から、1990年代頃は少年非行の第三のピークは過ぎたものの、以前として数字としては高い水準であることがわかる。そのため、学校での問題は少なくなく、そこから生徒による女性教師に対する事件が起こることも多かったと考えられる。1983年の3月には大阪で中学校3年生2人が保健室で女性教師に対してわいせつな行為を行なったとされ、また同じ年の5月には注意した女性教師に対して中学3年生の男子生徒が殴る蹴るの暴行を加えたという事件が起こった。更には、このことに対して生徒は「女の先生だから」ということを述べており、成長してきた男子生徒にとって自分たちより身体的に弱い女性ということで暴行をしていたということが考えられる。1991年9月には岩手県で高校3年生の男児生徒が女性教師の腹部を蹴り死亡させるという衝撃的な事件も起こるなど、女性教師に対する男子生徒の事件というものが何件か報道されている。

3-4 まとめ

この時代のテレビドラマの特徴としては2つ考えられる。一つは女性教師を主人公としたテレビドラマが登場したことである。今までは物語のヒロインや男性の主人公教師のただの同僚としての位置づけでしかなかったのだが、この時代の女性教師はか弱さを前面に出すのではなく、力強く熱血的に奮闘しているのである。男性教師同様、女性教師に求められているものというのは熱血で子どもたちのために全力で問題解決をしようとする教師である。女性教師に対しては、わいせつ事件や暴行事件など性別の違いから被害者となることも少なくなかった。そこでテレビドラマにおいては強い女性教師を描き出すことで応援していたようにも感じる。女性教師を主人公とし始めたのはこの時期であるが、この後の時代の女性教師が主人公のテレビドラマや漫画などの基礎のようにも感じる。『ごくせん』などはその典型なのではないのだろうか。

もう一つの特徴は、今までの定番であった熱血で理想を追い求める教師以外の姿が描き出されたことである。信念がないわけではないが様々な意見を言う子どもたちに振り回される様子が見て取れる。口調や振る舞いは非常に柔らかく、怒鳴ったり教師が走ったりする様子などは見られない。子どもたちに自分で考え自分で解決させようとするスタンスが見られる。決して放任なわけではなく気に掛けながらも、所々ヒントとなる言葉を投げかけることで問題解決へ導いていくのである。このテレビドラマから受け取ることができる求められている教師像は、子どもたちの自主性を尊重し優しく見守ってくれる教師であると考えられる。やはり、テレビドラマと教育界の動きというのは少なからず関係し合っているのである。

第4章 1990年代後半～2000年代のテレビドラマ

4-1 1990年代後半～2000年代-規格外の教師、問題教師の登場-

様々なジャンルのテレビドラマが登場してきた中で、教師を主人公にしたテレビドラマも多様化してきており、その中でこの頃登場してきたのが今までの常識にとらわれない教師である。その中でも代表的な作品に『GTO』・『ナオミ』・『ごくせん』など一般的には教師に向いていないととらえられがちな人物が描かれている。

4-1-1 『GTO』

この作品の主人公である教師は私立高校の教師であるが、もともと暴走族出身の不良であった。生徒に起こる問題に対して非常識なやり方ではあるものの、問題の解決に導き、最初は敵対していた生徒たちと関係を築いていく様子が描かれている。

原作者である藤沢とおるは自身が描きだした鬼塚英一という教師について、最初から生徒と同じ目線を持っている、いわば「近所の兄貴」といった存在(竹内,2009:12)と述べている。現代では少なくなった近所のガキ大将やカミナリオやじといった、自分に対して厳しく接しつつも、本当に困った時には助けてくれる存在として鬼塚英一をつくりだしたのである。その中で、生徒たちを取り巻く問題を学校の他の教師たちとは違った姿勢で解決していくのである。教師である鬼塚は学校内の権力に屈することなく、学校に漂っている教師の停滞感、事なかれ主義を批判し、自身の気持ちで行動していく。それによって学級の生徒たちはもちろん、教師たちの考え方も変えていくのである。

図 4-1 GTO



出典：Amazon.co.jp

4-1-2 『ナオミ』

この主人公は高校の家庭科の女性教師である。そして過去に自身の生徒や生徒の親との恋愛に関する問題で26回も解雇されているのである。物語の中では、普通ではない破天荒なやり方で生徒たちの問題行動を解決していく。学級で起こる男女関係の事件に対して独自の方法で解決に導いていく。その内容から、女版GTOと言われることがある。

4-1-3 『ごくせん』

主人公は任侠集団の娘である女性教師である。他の教師であればあきらめてしまうような落ちこぼれの集まりである学級の担任をしており、他の学校との喧嘩など問題が絶えないが、熱血的な関わりを持つ中で生徒たちと関係を築いていく。学校での様子というより

は生徒たちに起こる問題(主に他校との争い)を中心に物語が展開していく。主人公教師は任侠集団の中で育ってきたこともあり、他校の男子学生との戦いのシーンでは圧倒的な力で自身の学級の生徒たちを守っていく。

4-2 1990年代後半～2000年代のテレビドラマに見る教師像とは

この時代のテレビドラマに登場する教師は、一般的な視点で考えると教師らしい行動と見えるような行動をとっているわけではない。世間一般からすると教師としてというより、一人の人間としても正しい行動には見えない場面もある。しかしながら、そのような行動をとりながらも、最終的には自分の信念を貫き通し子どもたちのために懸命に問題解決へ向け奔走するのである。教師の設定が一般の感覚では考えられないような設定のものも多く、リアリティがないとして受け取られるかもしれないが、実際はこのような教師たちは人気があるのである。1960年代後半には国民にそんなはずはない、リアリティがないとされるテレビドラマの教師像はあまり受け入れられないとされたが、1990年代後半～2000年代にかけては、実際にいたらいいという願いも込めてこのような教師というものがまたテレビドラマにおいて描かれ始めたのではないのだろうか。

また、この頃の社会的な背景として、問題教師ということが多く取り上げられていた。テレビドラマにおいて、あえて当時問題となっていた強い個性的な教師を主人公としているが、全ての教師に共通することは、子どもたちのためには全力であるということである。その通常では考えられないやり方ゆえに学校内外からの反発は多いものの、自分の信念のもと、立場が上の人間にも強くぶつかっていくのである。一般的に普通として描かれる他の教師たちは、自分の保身のため危険なことはしないが、主人公教師たちは自らの身を投げ出してでも子どもたちを守ろうとする。

学校内で権力を持ち、自身の昇進のことばかり考え、学校というものを一方的な管理とといったかたちで運営していく様子や、校長や教頭の指示だけに従い自分の信念を持たない教師が多いといった現状がある。一見すれば、そのやり方が一般的なのだが、問題教師という立場を使いながら、教師たちの事なかれ主義を批判している様子がうかがえる。

加えて、この頃教師の精神疾患についても問題となっていたが、そのような問題を抱えていた教師たちに向けた応援の意味も込められていたのではないかと考えてしまう。教師が精神疾患になってしまう要因としては、子どもや保護者の対応をうまく処理できず自分の中でため込んでしまうことが考えられる。このような教師に対する状況が厳しいからこそ、テレビドラマの中では様々な圧力に屈しない強さを持った教師が描かれ求められていたのだと考えられる。

このような教師や学校側の対応に対する現状、この時代の社会的な背景から GTO の原作者である藤沢とおるはインタビューで、描きだした教師について、かつての青春モノのような偽善はやめ、建前でなく本音で勝負する先生(竹内,2009:11)だと述べている。問題を起こさないように何もせずただ言うことを聞くだけの教師では何も問題を解決することは

できない。自分の信念を持ち、新しい時代の子どもたちにとって一番良いことは何なのか考えられる、新しい教師が作りだされたのである。

テレビドラマが多様化してきていることから、当然制作者側の新しい学園ドラマをつくりたいという思いもあったと思う。そこから、当時の教師の状況を考えていくと、あえてこのような規格外や問題のある教師を登場させることでかつてのテレビドラマで描かれていた教師像だけを求めているのは今の時代の子どもたち、それから保護者に対応できないと感じていたのだと考えられる。また同時に、女性教師の主人公というものも一般化してきており 1990 年代前半からの流れを受け継いでいると思われる。特に『ごくせん』は強い女性教師の代表であり、男子生徒や男性教師よりも力や精神的な強さが受け入れられたのだと思われる。

4-3 1990 年代後半～2000 年代の社会的背景とは

2000 年代前後になってくると、テレビドラマの中では、今までのような教師らしい教師というよりは、何か特徴を持った教師が描かれ始める。それは一見、生徒・他の教師・保護者からすると信頼することのできない経歴や行動であるように取ることができるのだが、その型破りなやり方で様々な問題を解決していくのである。

その背景には、この頃の教師に関する大きな問題が 3 点あると考えられる。一点目は、教師による不祥事が多く取り上げられるようになってきたことである。その中で、閉鎖的な学校空間に不信感をもつ世間や保護者が増えてきており、メディアでの報道でも教師の不祥事を報じることも多くなってきている。二点目は、教師の心の健康問題についてである。保護者や世間への対応から、自身の体調を崩し休職する教師も増えてきていることである。三点目は、教師の立場や取り巻く環境の変化である。教師という職業に対する世間の考え方や感じ方がこの時代、今までとはまた違った形で捉えられているのである。

4-3-1 教師の不祥事

教師の不祥事については、子どもたちの模範となるべき職業であることから、多く報道されているのが現状である。以前からも小さな事件はあったと思われるが、年々教師が起こした事件ということで報道されることが増えてきている。

以下の表 4-1 は、実際に懲戒処分を受けた教職員数を示している。

教師の懲戒処分は平成 10 年度からのデータではあるが、総数はそれほど大きく変化しているわけではない。しかしながら懲戒免職をされるような大きな問題を起こしている教師は年々増加している。その主な理由としては交通事故、交通違反があるが他に大きな問題として、子どもたちに対するわいせつ行為、体罰などが挙げられる。これらは、この時代のテレビドラマの放送された時代である 2000 年頃からメディアでも報じられることが多くなってきている。

表 4-1 教育職員に係る懲戒処分の推移

(単位：人)

年度	懲戒処分				合計	訓告等	諭旨 免職	総計
	免職	停職	減給	戒告				
10年度	55	135	208(8)	360(28)	758(36)	1741(506)	37	2536(542)
11年度	92	154	206(9)	1586(34)	2038(43)	2872(738)	27	4937(781)
12年度	98	151	234(12)	444(57)	927(69)	3007(883)	32	3966(952)
13年度	92	185	239(20)	557(49)	1093(69)	2873(853)	18	3984(922)
14年度	153	257	287(21)	516(78)	1213(99)	2316(769)	16	3545(868)
15年度	174	244	280(28)	661(91)	1359(119)	2954(1111)	28	4341(1230)
16年度	165	180(1)	294(27)	587(68)	1226(96)	2461(798)	14	3701(894)
17年度	156	190(2)	301(22)	608(44)	1255(68)	2814(851)	17	4086(919)
18年度	187	185	295(30)	492(175)	1159(205)	3362(888)	10	4531(1093)
19年度	168	162	242(19)	12315(70)	12887(89)	4582(773)	13	17482(862)
20年度	182	157(1)	309(26)	411(44)	1059(71)	2954(951)	7	4020(1022)
21年度	166	148	246(23)	383(114)	943(137)	7031(915)	7	7981(1052)
22年度	187	163	220(43)	335(51)	905(94)	3397(771)	2	4304(865)

()は非違行為を行った所属職員に対する監督責任に対する懲戒処分等を受けた者の数で外数。

注：19年度は北海道・札幌市において大規模な争議行動があったため、他年よりも一万人ほど多い

出典：文部科学省教育職員に係る懲戒処分の状況より筆者作成

わいせつ行為による事件としては、盲学校の男性教諭が、視覚障害の生徒に強制わいせつを行い懲戒免職になったというものや、中学校の担任教師が教え子とみだらな行為に及んだというものなどがある。本来は味方であるはずべきの担任教師が立場を利用しこのようなことを行うというのは、教師という職業の信頼を失わせる行為でもあり、人間としてはいけない行為である。また、2008年6月10日、教師がクラスの生徒にクラスの中で一番嫌いな生徒のアンケートをとり、その生徒を実名で発表しいじめに発展するといった事件が発生した。教師はクラスの間人間関係を把握したかったようだが、それを公表することによってどうなるかまでは考えていなかったようである。教師が自分の目で見え感じとることができない人間関係を、生徒たちに名前を記入させることによって把握しようとするのは当然良くないことである。他者との関係づくりが難しい年代の子どもたちに対して行ったことによって傷つく子どももいることを理解し、自分の力でクラスの様子を把握できるような努力が必要であったといえる。

4-3-2 教師の健康問題

すでに述べたように学校における諸問題は多様化してきており、その対応はより難しいものとなっている。生徒や保護者への対応はもちろん、同僚との関係の中で、うまく処理することができず、自分の中にため込んでしまう教師も少なくない。その結果自身の健康問題により、休職や退職、最悪の場合には自ら命を絶つということもあり、大きな問題となってきた。

図 4-2 教員のメンタルヘルスの現状



出典：日本教職員組合

文部科学省では、毎年教員のメンタルヘルスに関する調査を行っている。図 4-2 がそれにあたるのだが、教員の病気による休職者は年々増加していることがわかり、そのうち精神疾患が占める割合も多くなってきている。この調査による数字は、精神疾患による病気休職をすることを申告できる環境が整ったために増加したと考えることもできるので、単純に増加したとは言えないが 1990 年代後半～2000 年代にかけても、その数が多いことがわかる。2000 年では病気による休職者は 4922 人にのぼるが、そのうち精神疾患が原因で休職した教員は 2262 人と約半数に及ぶ割合である。このことから、学校現場での教員はストレスとの戦いが多く、精神的な疲弊とともに教壇に立っているということがわかる。そのため、教師の心の健康問題が多くなってきているのである。

4-3-3 教師の立場の変化

このような教師自身に精神的な問題が起こる原因には教師の地位低下といったことが挙げられる。以前までは教師という職業は聖職と言われ、子どもたちや保護者の方々からの信頼があった。しかし、保護者の学歴が高くなるにつれて、また、バブル期を越えてきた世代が親となった時、当時は教師という職業は人気のない職業であったため上から目線で

意見を言われるということもある。その中で我が子を学校に任せるだけではなく、自身の考えも強く持つようになったため、子どものために自分の意見を強く言うということも起こっているのである。これらの問題について行き過ぎた干渉をする保護者、モンスターペアレントが2000年ごろから問題となり始めてきたのである。そうした家庭で育つ子どもたちも少なくなく、保護者との問題と同時に子どもたちの学校における問題というものも変容してきたのである。

4-3-4 モンスターペアレントと呼ばれる保護者たち

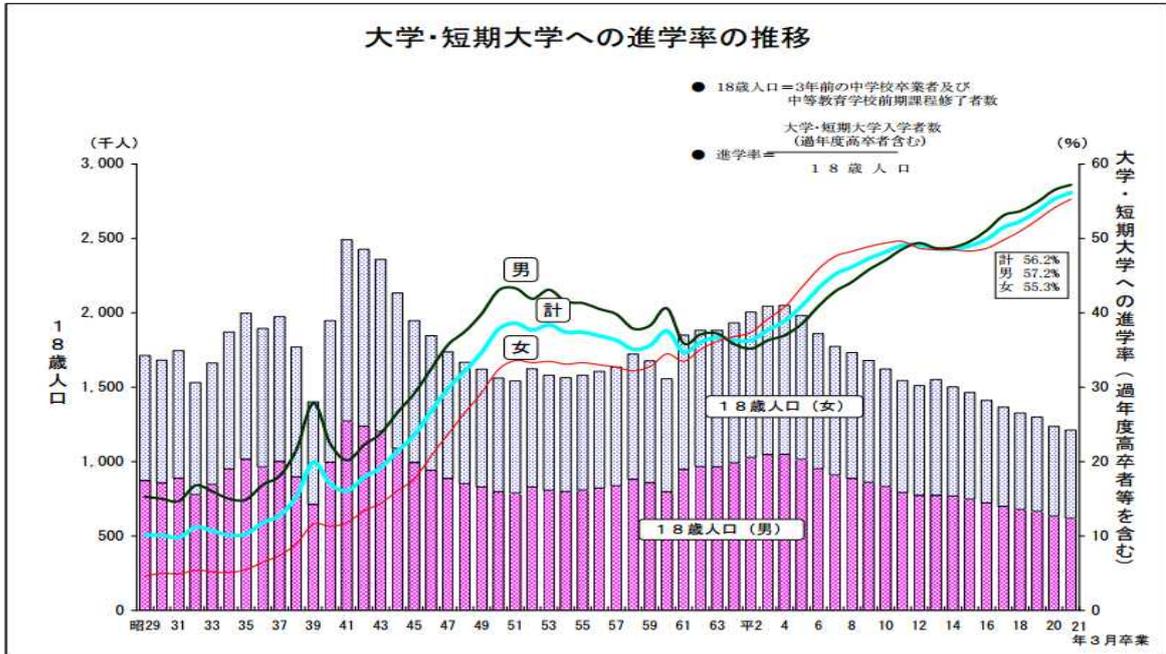
教師が近年苦勞している問題として保護者対応というものが良く聞かれる。それは、保護者が自分の意見を通したいがために一般的には受け入れがたい様なものを学校や担任教師に要求するというものである。教育評論家の尾木直樹氏はこのようなモンスターペアレントと呼ばれる保護者たちを、我が子中心型・ネグレクト型・ノーモラル型・学校依存型・権利主張型の5つに分類している。それぞれの例として、学芸会の主役を我が子にやらせてほしいと要求する過保護過干渉の保護者、学校からの呼び出しに一切応じず我が子に関心がない保護者、深夜や早朝に教師に電話をかけてくるなど教師の私生活を無視するような保護者、毎朝学校まで子どもを起こしに来てほしいなど本来家庭でやるべきことを学校に頼んでくる保護者、給食費は義務教育だから払う必要はないと法律や権利を振りかざしてくる保護者などがいると考えられる。この例は実に一部ではあるが非常に教師や学校にとっては対処しにくい問題となっている。

このような背景として、保護者との関係づくりによるものが近年の大きな問題となっている。文部科学省が実施した教員勤務実態調査(全国の公立小中学校2160校を対象に2006年に行われた調査)において、小学校の教員の74.9%、中学校の教員の70.6%が保護者や地域住民への対応が増えたと感じていると回答しておりその実態がうかがえる。ここには、保護者との関係とともに、地域と学校の距離感についても問題があると思われる。一昔前までは、地域と学校は密接な結び付きがあり地域が学校に協力するという状況もあった。しかし、最近では地域と学校、更には保護者自身が住んでいる地域との交流が減っているという現状もある。そのため、地域という緩衝材を失い、苦情がダイレクトに寄せられるようになってきた(尾木,2008:76)のである。以前であれば、学校や教師に対する疑問というものを地域の他の母親や、年上の方々と話すことで自身の考えを改めることもあったが、現在では自分が思ったことを思ったまま一般的には受け入れがたい意見だとしても学校に寄せてくるのである。加えて、核家族化の進行という面でも、子育ての身近な先輩であった母親が近くにおらず相談しにくくなっていることも学校へ苦情をダイレクトに寄せてしまう原因であるとも考えられる。

4-3-5 子どもたちの教師に対する気持ちの変化

そうしてこの時代は子どもたちの問題点というものも大きく報じられるようになってきた。そのことについても、一昔前までのように表の部分で明らかに素行に問題がある子どもがいじめ等を行うというものだけでなく、一見真面目そうな生徒が実は裏でいじめをやっていたり、教師をバカにしたりという状況が普通となっていたのである。原因としては、子どもたちの中にインターネットが日常化したことが考えられる。昔ならば、質問を教師にし、それを教師が答えてあげることで尊敬につながることもあった。しかし、今では子どもたちがインターネットで調べてきたことを「〇〇って××なんだよ。知ってた？」のように教師にぶつけ、それを教師が答えられない場合には「なんだこんなことも知らないんだ」と、教師に対して尊敬という感情を抱かなくなるという結果につながることも考えられる。全ての情報を教師が把握していることは難しいがそのような現状があるのである。また保護者が子どもの前で平気で教師のことを悪く言ったり、バカにするような発言をしたりすることも一つの要因である。すでに述べたように保護者の側の学歴も上がってきており、そのため出身大学や偏差値などの尺度で物事を考える保護者が増えてきているのである。図 4-3 では大学・短期大学の進学率を示しているが、昭和 40 年代に急激に伸び、その後は 40 パーセント弱の割合で推移していることがわかる。

図 4-3 大学・短期大学への進学率の推移



出典：文部科学省学校基本調査

日本の経済成長とともに家庭も裕福になりつつあり、教育という面でも大学進学を目指す人々が増えてきた。人口の増加とともに大学が新設されたこともあるが、多くの人々が大学に進学したのである。そして、90年代に入り、バブル時代を越えて大学を出た多くの

が親となり、今までの保護者とは印象が変わってきたのである。子どもは保護者の影響を受けやすいので、保護者と同じように教師に対して悪い印象を持ってしまい学校での教師の影響力というのは弱まってしまうのである。子どもも、保護者に守られている、学校側は保護者に強く言えない、教師は手を出せないということを理解しておりその態度はますます強くなっているのである。

4-3-6 文部科学省答申による比較

1996年の「文部省 審議会答申等(21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申))」では、主にゆとり教育が前面に提言され、自ら学び自ら考える「生きる力」の育成を重視した学校教育を担う教員が必要とされた。そのために、豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力を培わなければならないのである。更には、今日のいじめや登校拒否などの深刻な状況を踏まえるとき、教員一人ひとりが子どもの心を理解し、その悩みを受け止めようとする態度を身に付けることは極めて重要なのであるとされている。

この点について、1990年代後半のテレビドラマでは、一般的に問題教師と言われるような教師が主人公となっている。テレビドラマの中では生きる力につながる授業の様子というものは見受けられないが、この頃問題視されていた学級内の教育問題を解決していく様子を主体として物語が進んでいっている。実際の現場でも昔のような表に見えるような形で問題となっていた校内暴力や非行というものではなく、普段の生活からはすぐにはわからない裏の部分で行われているいじめや家庭での問題というものが主体である。このように一見ただけでは気付けない部分というものも多いが、テレビドラマでの教師が子どもたち一人ひとりの心を理解していることが、文部省の発表のような教師が視聴者にも受け入れられているのだと考えられる。

4-4 まとめ

この時代のテレビドラマで多く登場したのは問題教師と呼ばれるような、今までの教師らしさや人間らしさという部分が前面に出された教師とは少し違っている。主人公教師の生い立ちや学校での振る舞いが普通では考えられないような場面も見受けられる。しかしながら、どの時代の教師にも共通して言えること、また求められている資質というのは、子どもたちに対して真剣に向き合って、起こる問題に対して、最後まで突き進んでいく姿勢というものであると思う。他の時代の教師たちもそうであったが、自分の信念を持ちながら常に子どもたちと向き合っている教師というものが様々な年代から受け入れられているように感じる。近年においては、教師という職業は様々な問題を抱えながらの仕事となっている。教育的な問題のみならず、学校外での保護者への対応というものはその主たる部分である。その際には自分だけで考えるのではなく、同僚教師に相談するなどしてより良い解決策を考えていくことがこれから必要となってくることはないだろうか。教師の

心の健康問題も大きな問題となってきたことは学校という職場がどれほど大変かを感じさせられるが、それを乗り越えてまで子どもたちのために何かしてあげたいという気持ちを持ち学校での生活をしていかなければならないのである。世間の目は、こうした教師の大変さという部分だけではなく、どうしても不祥事の方に向いてしまいがちである。以前より教師による不祥事は増えた訳ではないが、テレビ等で報道される量は増えているように感じる。それは教師という職業が子どもたちを育成する大切な職業であり模範とならなければならないからである。変化が著しい社会において教師の子どもたちに対する役割はますます大きくなってきている。理想の部分は持ちつつも、教師として子どもたちに対してどのような有効な手段で接していき成長させられるかといった、より現実的な部分が求められているのである。

第5章 現在のテレビドラマ

5-1 現代-謎をかかえた教師の登場-

近年描かれている教師は二面性を持った教師であると考えられる。物語の最初ではとても冷血で何を考えているのか分からないが実はそれは子どもたちのために想ってのことであったというような『女王の教室』や、一見勉強とは関係ない方法であるが受験に役立つ方法であったというような『ドラゴン桜』のように最初は教師を敵や悪として捉えるが実は子どもたちの味方であったというような描写で描かれていることが増えてきている。これは教師と生徒のやりとりだけではなく、教師の生きてきた背景なども合わせて視聴者に考えさせたいという意図があると思われる。最近では熱血教師や問題教師が主人公になってこないのは実際の学校現場においては成り立たないからではないだろうか。同僚や、上司である教頭や校長からは厳しく指導されてしまう。同時にすでに述べたように保護者からの苦情が多く、現実的ではないという部分もあると考えられる。

5-1-1 『女王の教室』

笑顔もなく、表に見える熱血さも見るできない一見すると冷血な教師である。小学校6年生の担任の女教師であるが、子どもたちにとっては鬼教師として恐れられている。徹底的な管理教育で学級を支配していくが、教師の狙いは教師という壁をクラス一丸となって乗り越えていくことで逆境に立ち向かう自信やたくましさを身につけさせることである。子どもたちにとっては怖い一面しか見ることができないが教師は子どもたちに社会に出てから様々なことを乗り越える力をつけてほしいという願いからこのような行動をとっているのである。そのようなこともあり、最終的には子どもたちが教師を信頼している様子も見受けられる。

図 5-1 女王の教室



出典：Amazon.jp

5-1-2 『ドラゴン桜』

東大合格をさせるため、特別進学コースの担任となる弁護士が主人公である。本当に意味のあるかわからないような特別授業によって着実に学力を向上させていく。生徒たちは、自分たちの気持ちを考えず罵倒する教師に反発をしながらも、成長していくのである。東大合格への勉強の様子とともに、特別進学クラスの生徒たちの人間関係の成長も見て取れる。

5-2 現代の社会的背景とは

第4章で述べたものの延長であると考えられる。主な問題としては、教師の不祥事や心の健康問題、保護者対応の難しさなどがあると考えられる。

5-2-1 教師の抱える問題

教師の抱える問題は多様化、複合化してきており一つの問題が他の問題と密接に関連している。教師は先に述べたように心の健康問題が大きな問題として取り上げられている。精神疾患による休職者も年々増加しており、新聞記事によると、文部科学省は24日、うつなど心の病で11年度中に休職した教員は5279人だったと発表した。2年連続で減少したものの、10年前(02年度2687人)の約2倍で、08年度から5000人を超える高い水準が続いている。同省は「学級を一人で受け持ち、保護者との関係の悩みなどを同僚や上司に相談しにくい状況が依然あるのではないかと分析。今年度中に対策を検討する(毎日121225)とある。また、その休職者数は調査を始めた1979年度との比較では約8倍となっており深刻な状況が続いているのである(尚、北海道における2010年度の調査では病気休職者が496人いるのに対し、精神患者数は367人と78.3%という高い割合である)。教師は転勤の多い職業であるため、何年かすると職場や同僚が変わることも多い。その際に、ある程度のコミュニケーション能力をもっていないと同僚教師や上司に相談をすることが難しく、自分一人では教育の問題を対処しきれずストレスとなってしまう場合があるのである。このように、保護者対応の難しさという一つの問題から、教師自身の健康問題、更には子どもとの信頼関係の構築といった部分にまで及んでいるのである。

5-2-2 文部科学省答申による比較

近年求められている教師像というのは、これまでの文部科学省の発表よりもより具体的になっている。そこには時代とともにメディアで報じられる教師の不祥事の多さもあると思われる。平成17年10月26日の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」において、人間は教育によってつくられていき、その成否は教師にかかっていると言っても過言ではなく、そのために子どもたちや保護者の他に広く社会から尊敬され、信頼される質の高い教師が必要なのであるとされている。加えて、あるべき教師像について明示しており、優れた教師の条件の要素として3つの要素が重要であるとしている。

1点目は、「教職に対する熱い情熱」である。教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などである。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

2点目は「教育の専門家としての確かな力量」である。「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

3点目は「総合的な人間力」である。教師には、子どもたちの人格形成に関わる一人の人間として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体を同僚として協力していくことが大切である。

これら3点は、これまで見てきたどの教師像にもあてはまるような教師であると考えられる。その中で特に現代は3点目が大切になってきており、教師自身が他の職員とより良い関係性を保ちながら、学校全体で子どもたちを育てていくという意識が必要になってきているのである。

5-3 まとめ

現代においても、教師が抱える問題は依然として大変さを増している。その内容は保護者対応や同僚との関係づくりの難しさ等人間関係の部分であり、そのことによって精神疾患になる教師も少なくない。求められている教師として、文部科学省からより具体的なものが出され、求められている教師というものが鮮明になった。

また、これまでの章で考察してきた教師像を現代にあてはめて考えてきたが、やはり、どの年代の教師も現代に通ずるものがあると考えられる。どの教師たちも、アプローチの違いはあるもの子どもたちのために何とかしようという気持ちは変わらない。特に現代では目まぐるしく情報は変わってきており、子どもたちも様々な情報の中に生きているため様々な個性をもった教師がいても良いと考えられる。

第6章 総括

6-1 これまでの教師像を現代にあてはめる

これまで、5章にわたって各年代の教師像について考えてきた。しかし、それらは各年代だけに求められていただけでなく現代においても必要な資質があると考えられる。そのことについて現代にあてはめて考えていきたい。

1960～70年代のテレビドラマでは、スポーツによる教育によるものが主だったが、これは現代の教育においても置き換えて考えることができる。スポーツという教師の強みを生かして子どもたちを教育するというのはとても有効な手段である。音楽が得意な教師ならば歌によって学級経営をするということも良く聞かれる。1960～70年代はスポーツを通じた教育というものが東京オリンピックの開催という社会的な背景のもとテレビドラマとして描かれた。当時は子どもたちや国民がみな同じ方向を向いていたため、そのような教師が求められ、期待に応えやすい面もあったのである。現代においては、スポーツに限らず、教師自身の強みや長所を生かした教育というものが求められているのである。

1970年代後半にテレビドラマに登場する教師からは、その人間性や率直な熱血教師の姿が見えてくる。この時代の教師は現代まで理想の教師としてされることが多く、教師を目指す者は一度はあこがれる教師たちが登場する。この子どもたちに対してどこまでも熱血である姿勢と言うのは、現代の教師においても通じて必要な資質であると思われる。学校は閉鎖的な空間と言われることもあるが、教師を通じて地域や家庭とつながりを持ち、学校をより身近なものとして多くの人々の協力を得る姿は現代においても見習うべき姿であると考えられる。

1990年頃は今までとは反対に独特のゆるさを持った教師も登場する。子どもたちを教師が引っ張っていくのではなく、子どもたちに自分で考えさせ解決させる様子が描き出される。このことは、現代の教師が求められている、生きる力の指導という部分に重なる。子どもたちが自ら学び、考え、行動し、問題解決することができるよう、教師が適度な距離感を保ちながら子どもたちに適度な働きかけを行うことが必要であると考えられる。

1990年代後半頃は、問題教師と呼ばれる教師が主人公のテレビドラマが多く作られた。そこに登場する教師というものは実に個性的であり、その問題解決能力にはすごいものがある。このことは、閉鎖的で画一的な教師が多くなっている現状に対するものであるとも捉えることができる。教師においても多様な教師がいて良いと思う。他の教師とは違った角度から物事を見ていき、子どもたちのために全力で物事に取り組んでいく姿勢は見習うべきところである。

6-2 総括

本論文では、年代ごとのテレビドラマから求められる教師について考察し、その社会的

背景などを考えてきた。テレビドラマは今はとても身近な存在であり、毎年のように学校を舞台としたテレビドラマが放送されている。そこから、年代ごとに作品の特徴をとらえ、主人公教師とその教師がつけられた社会的背景について考えてきた。

第1章では、1960年代後半から1970年代前半にかけての青春シリーズのテレビドラマから理想とされる教師像を考えてきた。ここでは、スポーツによる子どもたちとの関わりを通して指導していくという教師が求められていたように思う。社会的な背景から、スポーツは国民の中で非常に関心があることであり、また日本の復興と重なっていたためスポ根というジャンルでテレビドラマがつけられたのである。部活動という観点では、集団の中の一人ということでそこから不良生徒が更生していく様子に共感が持たれたのである。教師は、強い姿勢で子どもたちを引っ張っていきその圧倒的な力が求められていたのである。

第2章では、1970年代後半から1980年代前半頃の熱血教師から理想とされる教師像を考察してきた。ここでは、より子どもたちの様子を観察し変化に気付ける教師が求められていたように思う。テレビドラマの中では私生活を省みず子どもたちのために私生活の時間を使っている様子も見て取れた。子どもたちの身の回りには勉強に関することや、少年非行の増加に伴って学校が荒れていることなど、非常に学校生活が難しくなっていた時代である。そのような背景から、今まで親の世代が経験したことがない様な時代を生きている子どもたちにとって、頼りがいのある教師というのが求められていたのである。

第3章では、1990年前後の女性教師や熱血さが今までに比べ見られない教師から理想とされる教師像を考察してきた。ここでは、女性教師の躍進から男女関係なく教師は子どもたちに屈せず自分の信念のもと行動することが求められているのである。また、教育界の動きから子どもたちに自分たちで考え行動させる「生きる力」を育成させることが教師には求められ始めてきた時代でもある。教師主導で何でもやるのではなく、適度な働きかけによって子どもたちに考えさせながら問題を解決させることができる教師というのが求められてきたのである。

第4章では、1990年代後半の一般では考えられないような問題教師から理想の教師像を考察してきた。ここでは、世間に増えてきていた問題教師が主人公となり子どもたちの前に登場してきていた。教師の心の健康問題や学校外での保護者への対応など、授業以外の部分で難しさが増え、ストレスが増大していた実際の教師たちに対する形で新しい教師が登場し、どんな圧力にも屈しない強い精神力が求められていたのである。

第5章では、2000年以後のテレビドラマから新しいタイプの教師像を考察してきた。近年の教師の抱える問題やこれまでより具体的な文部科学省答申を見ることで、求められる教師の資質について考察した。

このように、時代ごとに求められている教師像は社会的背景や教育界の動き、文部科学省の方針に合わせるように変わっていつている。ここからわかることは、テレビドラマは社会を映す鏡ということである。テレビドラマを見ていくことで社会に起こっていること、

さらには教育界の変遷というものを知ることができる。

教師による子どもたちへの接し方は時代ごとに全く違うが、どの時代のテレビドラマでも教師の根底にある想いというのは同じように思う。子どもたちのことを一番に考え、熱心に子どもたちとの良い関係を築いていくのである。見た目通り熱心な教師もいる一方で、一見ひどい仕打ちのように見える場合もある。しかし、それは子どもたちのことを思っていることなのである。テレビドラマの中では、時代ごとに他の同僚教師に描かれるような“よくいる教師”ではなく、個性的で周りに染まらない自分というものを強く持っている教師なのである。

おわりに

さて、このように年代ごとのテレビドラマや社会的背景から求められる教師像を考えてきたが、ここから現代の教育課題について自身の考えを深めていきたい。

私が、現代の教師が抱える教育課題の中で考えていきたいことは保護者対応という点である。本論文の中でも 2000 年頃からその実態が増えてきたことを述べたが、その問題は今後の学校教育でも適切な対処というものが求められていると考えられる。本来、学校と家庭、教師と保護者というのは協力し合っただけで子どもたちにとってより良い教育を模索していくべきである。学校だけの教育では限界があり、よりよい成果と言うものは得られない。地域との連携ということも当然だが、家庭教育という点でも密な関係が必要になってくるのである。教師がただ日常の業務をこなしているだけでは保護者へ学校でどのようなことが行われているのか伝わりにくい。そのため、連絡帳や学級通信、現代では学校にホームページが開設されていることが主流となっているので、そこから情報を発信していくということも必要になってくるのである。さらには、教師自身が保護者からの疑問に応えられるように学校の教育目標を把握しておき、それをもとに教育活動をしていくことも重要になってくる。いずれにしても、保護者対応が目的ではなくあくまでも子どものことを第一に考え保護者との関係性を構築することが必要となってきているのである。それは教師も保護者も子どもたちのためという考えは同じだからである。

しかしながら、教師一人だけでは解決することが難しいということも現状として考えられる。何か問題が起きた際、校長は学校を守るという立場で、事なかれ主義的に波風を立てないように対応することが多い。近年のテレビドラマでもそのような描写が多いが、『熱中時代』では校長宅に居候して生活していることもあり、主人公教師が保護者からの苦情で困っている際には校長が毅然とした態度でその保護者と渡り合っているのである。私自身の教育実習での体験では、わが校ではモンスターペアレントと呼ばれる親はいないという話を聞くことができた。常に学校通信等を通じて、学校の様子を広く知らせよう努力しており、保護者から話を聞く際も担任教師のみの対応ではなく、校長や教頭も同席し話を聞く体制ができていているという。このように、管理職が強い対応をしてくれる学校も存在し、そこではモンスターペアレントという問題は大きなものとなっていない。教師たちも自分だけで抱え込むことなく学校全体で助け合う環境がつけられていることから、精神的に参ることなく良好な保護者との関係が作れているのである。学校内で起こる問題にしても、このような学校現場での問題には管理職の対応というものが多く関係してくると考えられる。いじめや不登校、体罰の問題など、どこの学校や学級でも起こりうる問題に対して教師が一人で対応するだけではなく、学校として管理職含め全体で対応をしていくということがこれからの学校に求められることである。

また、教師の精神的な部分では、心の病を発症する教師が増えてきているということはすでに述べたが、燃え尽き症候群(バーンアウト)ということも近年では言われている。教師

の多忙化やストレスから自分の追い求める理想と現実の違いに苦しみ退職するという教師が増えているのである。特に自身の理想に燃える教師に多く、抱え込んでしまうことが多いという。本来ならば、理想を実現するために熱心に取り組む教師は学校現場に求められているはずであるが、学校教育への過度な期待から多くのことを求められやる気や気力がなくなってしまうという。教師は精神的なストレスを多く受けやすい職業であるが、完璧にこなそうと自分一人で抱え込むことなく、他の教師とともに対処していくことが求められていくだろう。

このような考えから、これからの教師と言うのは、一人で突っ走ってできる職業ではないと考えられる。いくら有能であってもできないことは存在する。教育現場には多くの問題がある中で、その問題を他の教師に知られたくないからとひた隠しにして何とか自分だけで解決しようとするのはもはや厳しいことと言える。学級はまず担任教師が問題解決にあたるが、そこには学年の問題として取り組む他の教師がおり、更には学校の問題として取り組む他の教師がいる。それらをチームとして考え同じ気持ちで解決に向かい、起きてしまった問題を学校全体で解決していくという環境こそがこれから強く求められる形だと考えられる。私自身、これからその教育現場に入って教師として働いていく。その時良好な同僚との関係づくり、学校での対応ができるよう努力していきたい。

参考文献

- ・岡田晋吉,2003,『青春ドラマ夢伝説 あるプロデューサーの青春ドラマ日誌』日本テレビ放送網
- ・尾木直樹,2008,『バカ親って言うな！ーモンスターペアレントの謎』角川書店
- ・小山内美江子,1996,『金八語録』角川書店
- ・小山内美江子,2005,『25年目の卒業ーさようなら私の金八先生ー』株式会社講談社
- ・小野田政利,2006,『悲鳴をあげる学校 親の“イチャモン”から“結びあい”へ』旬報社
- ・佐藤晴雄,2009 - 2010,『総合教育技術』ドラマの中の教師像,小学館
- ・諏訪哲二,1998,『学校に金八先生はいらない』株式会社洋泉社
- ・多賀たかこ,1988,『はいすくーる落書』朝日新聞社
- ・竹内義和,2009,『モラルハザード』インフォレスト株式会社

参照 HP

- ・ Amazon.co.jp <http://www.amazon.co.jp>
- ・ E-Stat 政府統計の総合窓口 学校教員統計調査

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>

- 女教師研究所 HP <http://jokyoushi.x.fc2.com/index2.html>
- 総務省平成 24 年度版犯罪白書

<http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/59/nfm/mokuji.html>

- 日本教職員組合 HP <http://www.itu-net.or.jp>
- 文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/>

【付属資料】

教師ドラマ年表①(1965年～1999年)

年代	作品名	内容・特徴
1965年	青春とはなんだ(10月～'66年11月)	高校、ラグビー、熱血
1966年	これが青春だ(11月～'67年10月)	高校、サッカー、熱血
1967年	でっかい青春(10月～'68年10月)	高校、ラグビー、熱血
1968年	進め！青春(10月～12月)	高校、サッカー、生徒とともに成長、新米教師
1969年	炎の青春(5月～7月)	高校、女子バスケ、新任、自信過剰
1972年	飛び出せ！青春(2月～'73年2月)	高校、新任、サッカー、熱血
1974年	われら青春！(4月～9月)	高校、新任、ラグビー、熱血、
1978年	青春ド真中(5月～9月)	高校、×スポーツ、日常の出来事
	熱中時代①(10月～3月)	小学、熱血、体当たり、新任
	ゆうひが丘の総理大臣(10月～'79.10月)	高校、体当たり、
1979年	あさひが丘の大統領(10月～'80年9月)	高校、問題教師、ラグビー
	3年B組金八先生①(10月～'80年3月)	中学、受験戦争、家庭不和、妊娠、非行、自殺
1980年	1年B組新八先生(4月～9月)	中学、新任、中学一年生
	熱中時代②(7月～3月)	小学、続編
	サンキュー先生(9月～'81年3月)	小学版金八、子どもと成長、事なかれ対理想
	3年B組金八先生②(10月～'81年3月)	中学、校内暴力、非行、受験、家庭不和、いじめ
	ただいま放課後(5月～'81年3月)	高校、部活、熱血
1981年	先生は一年生(10月～'82年3月)	小学、新任教師、アイドル、女性
	2年B組仙八先生(4月～'82年3月)	中学、熱血、中学二年生
1984年	うちの子にかぎって(8月～9月)	小学、振り回される教師
	スクール☆ウォーズ(10月～'85年4月)	高校、熱血教師、ラグビー
	東中学3年5組(10月～12月)	中学、熱血、いじめ、管理教育との対立、
1988年	教師びんびん物語(4月～6月)	小学、小学生心理、統廃合
	3年B組金八先生③(10月～12月)	中学、食、無気力生徒、いじめ、ひきこもり、リスト ラ、保健室登校
1989年	はいすくーる落書(1月～3月)	工業高校、ヤンキー相手、弱い女教師
	教師びんびん物語Ⅱ(4月～6月)	小学、受験戦争、熱血
	愛し合ってるかい！(10月～12月)	高校、教師の恋愛
1990年	愛してるよ！先生(7月～8月)	小学校、新米教師、
1991年	学校へ行こう！(4月～6月)	高校、熱血教師、女性教師
	先生のお気に入り(6月～9月)	芸術高校、臨時教員、生徒教師の葛藤
1992年	教師夏休み物語(7月～9月)	高校、個性ある教師、対立
	クライじゃないぜ(7月～9月)	高校、特殊な規律、教師覚書
1993年	高校教師(1月～3月)	高校、教師との恋愛、社会的背景(同性愛・強姦)
	ツイズ教師(4月～6月)	高校、正反対の双子教師、
1994年	アリよさらば(4月～7月)	高校、受験、就職、
1995年	3年B組金八先生④(10月～'96年3月)	中学、いじめ、不登校、不況、発達障害、
1997年	職員室(7月～9月)	学校の現状・子どもたちの今(援交・セクハラ・体罰)
	GTO(7月～9月)	高校、破天荒な教師、社会・家庭・教育問題、
1999年	ナオミ(4月～6月)	高校、破天荒な教師、女性、
	魔女の条件(4月～6月)	高校、女性、生徒との恋、
	3年B組金八先生⑤(10月～3月)	中学、いじめ、学級崩壊、少年犯罪、体罰

教師ドラマ年表②(2000年～2012年)

2000年	伝説の教師(4月～6月)	高校、破天荒な教師、社会・家庭・教育問題
2001年	ガッコの先生(10月～12月)	小学、新任、子どもと成長していく
	さよなら、小津先生(10月～12月)	高校、子どもに教えられる
	3年B組金八先生①(10月～'02年3月)	中学、生と命、携帯電話トラブル、不登校、
2002年	ごくせん①(4月～7月)	高校、規格外教師、任侠、力強さ
2003年	ヤンキー母校に帰る(10月～12月)	高校、熱血、更生
2004年	3年B組金八先生②(10月～'05年3月)	中学、薬物、発達障害、家庭内暴力、給食費未納
2005年	ごくせん②(1月～3月)	高校、規格外教師、任侠、力強さ
	みんな昔は子供だった(1月～3月)	小学、田舎の学校、山村留学、子どもとともに成長
	女王の教室(7月～9月)	小学、熱血・道徳とは対極
2006年	ドラゴン桜(7月～9月)	高校、規格外教師、東大進学を描く
2007年	ガチバカ!(1月～3月)	高校、バカな熱血教師
	3年B組金八先生③(10月～'08年3月)	中学、モンスターペアレント、学校裏サイト、
	学校じゃ教えられない!(7月～9月)	高校、お色気、部活(社交ダンス)
	ごくせん③(4月～6月)	規格外教師、任侠
2009年	太陽と海の教室(7月～9月)	高校、熱血、独自の授業法、
	赤鼻のセンセイ(7月～9月)	院内学級、笑いで心を癒す
2010年	おひとりさま(10月～12月)	高校、教師の恋愛
2011年	美咲ナンバーワン(1月～3月)	高校、ホステス、いじめ、おちこぼれ
	ハガネの女(5月～7月)	小学、熱血、女性
2012年	鈴木先生(4月～6月)	中学、リアルな(人間らしい)教師
	黒の女教師(7月～9月)	高校、あり得ない教師
	GTO(7月～9月)	高校、破天荒な教師